巻　頭　言

看護研究科長　七田　惠子

佐久大学看護研究雑誌（紀要）６巻が刊行されましたことは、本学の紀要編集に５年間携わったものにとって、うれしい限りです。

年1回の刊行ですが、１）背表紙が書けるだけの原稿が集まるだろうか、２）看護研究に関する論文はどの位投稿されるだろうか、３）投稿者、査読者、編集委員の折り合いは旨く付けられるであろうか、４）年度末に発刊できるだろうか等、１年を通じていろいろと気がかりなことが続きます。

そんな中、今後に向けて期待が持てるのは大学院生たちの紀要への投稿です。院生にとっては修士論文発表の場を確保でき、紀要に掲載することを通して佐久大学内外で知られるとともに、その後の学会論文投稿へとつながる可能性もあります。また、編集関係者は投稿論文数や頁数が増えるであろうと期待できます。

一般に、紀要は大学、短大、研究所等で多数刊行されています。ただし、理工学分野、医学分野で紀要はあまり重視されず、紀要に対する評価も学問領域によって異なり、医学分野では個人の業績にならないとか。一方、人文社会科学分野での紀要は学術雑誌に数えられ、研究者個人の業績となり、自己の大学の研究成果を収録することに紀要の意義があるとされています。

看護学は基本的には科学の範疇に入るけれども、人、心、ケアにふれて、「こうもり」の世界に入り込み、どの学会に投稿すべきか迷ったものでした。勿論、看護分野で紀要へ投稿する研究論文は業績の一部に数えられます。

近年、看護系大学・短大の設立は増加し、大多数は独自の紀要を刊行しています。本学においても設立初年度から紀要が創刊され、紀要委員は当初３人、現在は教職員８人に増え、投稿原稿の質の向上に努めています。

若手の研究者や大学院生の研究発表の場として、熟練教員の継続した研究成果の収録場所として、さらに、佐久大学の社会へのアピールの場として、研究・活動の報告を紀要に載せて、業績を積み、キャリア・アップに紀要を利用して頂くことを切に希望します。

２０１４年　３月